

【トップインタビュー】◇「フードバレー」で存在感＝米沢則寿・北海道帯広市長

20/09/14 08:30 NG23

就任10年目を迎えた北海道帯広市の米沢則寿市長（よねざわ・のりひさ＝64）。十勝地方が誇る農林水産物、食を通じた振興策「フードバレーとかち」を一貫して看板施策に掲げ、旗振り役を務めてきた。いまや地域を象徴するプロジェクトといえ、「おかげで食に絡む動きがあるときは『十勝抜きにはできない』と認識されるようになった」と存在感をアピールする。

「地域を巻き込めば効果は10倍になる」。フードバレーとかちは、十勝総合振興局管内1市18町村、農協、金融機関などが母体の推進協議会が進める。初出馬のときに各町村を回り、首長らに声をかけた。その際に利用したのが定住自立圏、国際戦略総合特区などの制度だ。「連携すれば、国から資金が入る。まずは支出がないわけだから、みんな『それならやってみるか』と。しばらくは『お手並み拝見』という雰囲気だった」。

特区を利用して、大規模と畜場の整備、食肉や野菜の輸出などそれまで及ばなかった事業が可能となり、10年間で管内農協の年間農業算出額は約1200億円増え、1.5倍に。大手食品メーカーが絡んだ商品開発も増え、多くの「十勝ブランド」が生まれた。全国から来る行政視察でも、フードバレーに関するテーマが最も多いという。

「いいタイミングで制度ができてラッキーだった」。政策を市に限定せず、町村とともに進めたことも企業トップ出身らしい戦略と言える。

だが、戦略の背景には苦悩もあった。高校卒業以来、疎遠だった帯広市に戻っての出馬。当時の市議会議長が対立候補だったこともあり、市内の各界から冷たい視線を浴びた。「あいさつに行っても会ってくれない。それならと町村を回った」と明かす。138票差での初当選だった。

好きな言葉は「衣食足りて礼節を知る」。就任以来、経済政策を中心に市政を展開してきた。「やはり三度のごはんがきちっと食べられないと。仕事づくりをちゃんとやって、人が離れていかない仕組みをつくることに力を入れた」。

民間投資会社社長から転身した異色の経歴。視点は常にビジネス感覚で、語り口は柔和だが、時折鋭い目に。起業支援の「とかち・イノベーション・プログラム（TIP）」では14件が事業化、7件が法人化され、国の評価も高い。「『絶対に結果を出せ』とハツパを掛けている。あきらめない姿勢が地域の応援につながる」と厳しい。

帯広市は2020年度に入り、大規模な組織改編に着手した。そこへ新型コロナウイルス対応。相次ぐ補正予算編成に、専用の課を設置しての市民対応。「ヒヤッとしたが、みんなしっかりと動いてくれた。自分たちが地域を支えているというプライドを示してくれ感謝している」と、ここでは目尻を下げた。

〔横顔〕帯広市生まれ。北大卒後、石川島播磨重工業（IHI）を経て、日本合同ファイナンス（現ジャフコ）入社。ジャフココンサルティング取締役社長を務めた後、10年初当選し、現在3期目。

〔市の自慢〕豊富な農産物に加え、地元産材料を使ったスイーツ。世界で唯一のばんえい競馬。

（帯広支局・金沢稔）（了）（2020年9月14日配信）



米沢則寿・北海道帯広市長

関連情報

人物 [米沢則寿氏のプロフィール](#)

帯広市（おびひろし）自治体情報



人口	166,889人 (2019年1月1日現在)
面積	619.34平方キロ
首長	米澤 則寿 (よねざわ のりひさ)
住所	080-8670 北海道帯広市西5条南7-1
電話番号	0155-24-4111
URL	http://www.city.obihiro.hokkaido.jp/
決算額(歳入)	81,354,391千円 (2018年度)
決算額(歳出)	80,488,646千円 (2018年度)

※本印刷物は時事通信社 JAMPサービスから印刷されました。

Copyright JIJI PRESS Ltd. All Rights Reserved.